
僕と彼女の共同生活

フジサキ螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女の共同生活

【Nコード】

N0480Z

【作者名】

フジサキ螢

【あらすじ】

親友から預けられた女の子・吏沙と、巨乳でロリ顔の彼女がいる僕の、微妙な共同生活。

1部屋しかない僕の狭い学生マンションの部屋で、彼女の部屋は押し入れの中。

押し入れの上段は彼女の寢床。

押し入れの下段は彼女の怪しい本が詰まっている。

僕の家には山内吏沙が住み着いている。

押入れを開けると、中で怪しい漫画を読みながらウヒョヒョと奇妙な笑い声を上げて笑うのが見える。

一度見てから僕は押入れを自分で空けないことを心に決めていた。ご飯の時間には、匂いを嗅ぎ付けてちゃんと出てくるし、まあいいかなと思っている。

吏沙は定期的に本屋に行つて大量に怪しい漫画を買つて帰ってくるのだが、おかげで押し入れの下段がその類の本でいっぱいになっている。

定期的、というか毎日なのだが…。

吏沙は犬が大好きなのに犬によく攻撃される可哀想な子で、本屋の帰りに傷を必ず1つは作つて帰ってくる。

手当てする僕の気持ちも分かつてほしいものだが、きっとこの女は永遠に理解などしてくれないと諦めた。

取り敢えず今日は用事があるから仕方がないので押し入れを僕が空ける。

「おい、吏沙。」

「ウキョキョ」

今日はウヒョヒョじゃなくてウキョキョと笑った。

そういえば此間はウへって笑つてた気がする。

「あ、なに？」

「僕、今日出掛けるから自分で飯食えよ。」

「えー。じゃあミルちゃん連れてきて」

「いや、無理だろ。」

ミルちゃんはお向かいさんが飼っている犬で、吏沙の最近の1番のお気に入りだ。

こいつはよくミルちゃんを相手に1人2役で喋っている。寂しいやつだ。

「ご飯、ピザがいい！ピザ！」

「いや、だから自分で食えって。」

「…ネタにしてやる」

「あー、分かった。注文しといてやるから。」

「いつてらっしゃい」

「…あー。いつてきます。」

家から出て、かぎを閉める。

吏沙が今日も本屋の怪しいコーナーで目撃されるんだろうなあ……。

家に帰ってきたら、吏沙が押入れから出ていた。

テレビを見ながらウヒョウヒョウ笑っている。

ああ、今日はあれか。

某アイドルグループが歌って踊る日か。

「あ、お帰り政弥」

「ああ。早く寝ろよ」

「……ネタにしてやる！」

「存分に見てください。」

吏沙はもう脅しの内容はすべてこいつのサイトのネタにするとか何とか・・・

絶対に嫌だ。

俺には巨乳でロリ顔の可愛い彼女がいる。

なのになんで、こんな居候の面倒を…くそ、将佳のやつ…！

将佳は吏沙の兄なんだが、将佳が留学するとかで押し付けられた。吏沙がニート故に1人で生活できないことを懸念したらしい。

僕なら彼女もいるし、吏沙はタイプじゃないし、なんか足が筋肉質だし、くそくらえだし…。

だから、僕のところに来てこられたわけだ。

週2、3程度で将佳からメールやら電話がくるが吏沙のことは一言も出ない。

うん、忘れたいんだろうな…。

そう思いながらPCを起動させると以外や以外。
将佳名義吏沙宛のメールがあった。

「おい、吏沙メール着てるぞ」

「誰から？」

「吏沙」

「へ？兄ちゃん？」

いそいそと覚束無い動きでハイハイしつつこちらにやってきた吏沙。PCを覗き込み、メールをクリックして開いてやると文章にすごい速さで目を走らす吏沙。

俺は他人のメールを見るのは気が引けたので別の方向へ視線を逸らして置いた。
が、しかし。

突如マウスに伸ばされた吏沙の手。

それは俺のそれに触れた。

「うわっ」

「へ？」

びつくりした俺に対し、それにびつくりする吏沙。
悪い、と一言言っマウスを吏沙に渡した。

「…兄ちゃん、来週帰ってくるって。」

明るくもなく、暗くもない。

そんな声で吏沙は俺との生活へのリミットを告げた。

それからというもの、今までの恩返しとでも言うべきか、吏沙は働き出した。

掃除、洗濯、パスタばかりな食事の準備、布団を干したりいろいろしてくれるわけだ。

大体失敗して僕が後片付けをしてるけど。

「吏沙、もういいから何もしてくれな。」

「何だと…！ネタにするぞ！」

「…できることだけしてください。」

僕の言葉に吏沙はフンフン歌いながらいつもの怪しい漫画を読み出した。

結局こいつにできることはこれだけか！

そうこうしている内に1週間程たち、何の連絡もなく唐突に将佳がウチにやってきた。

「よお、久しぶりだな。」

「本当にな。」

凄くいい笑顔でやってきた将佳に僕はいやみったらしく返してやった。

「吏沙、いい子にしてたかー？」

「うん、兄ちゃん並にはね。」

「相変わらず可愛くないなこの妹は。」

将佳と吏沙はあたりまえのように居間のテーブルを囲み、僕に向かって上目遣いでテーブルを叩くという行為で茶とお茶請けを催促してくる。

僕は2つのマグカップに水道水を、僕用のマグカップにウーロン茶を入れてテーブルに置く。

それからポテチを出した。

「うわ、水道水…政弥はウーロン茶の癖に」

「ポテチポテチ」

水道水に文句を言いつつポテチを貪る義正と吏沙。

なんて兄妹だ。

まあ、この二人の場合同級の年子なのでさして兄妹っていう感覚はないけど。

「あ、そうだ。まずは土産な。」

将佳はそう言って鞆からいろいろ取り出し始めた。

「マカデミアナッツのチョコとパンダチョコとコアラチョコ、カレーパウダー、紅茶、えーっと…ペナント、エッフェル塔の置物、自由の女神像の磁石、それから…」

「お前どこに行ってたんだよ…」

僕の突っ込みに二ヘラと笑う将佳。

こいつ、そんな長期間海外に出てなかったのに…なんてやつだ。

「で、あと吏沙の面倒を見てくれたお礼に、これね。」

す、と差し出された封筒。

金！？と少し喜びつつ封筒を受け取り、中をのぞいた。

「俺の部屋の鍵な。いつでも来い。炊事はこの中で一番上手いつもりだ。」

「…おう。」

あんまり嬉しくなかった。

「じゃ、そろそろ帰るか…吏沙。荷物は？」

「つめた。持って」

吏沙が将佳に差し出した鞆の中には怪しい漫画が大量に入っているようだ。

さっき押し入れの下の段を見たら何もなかった。

「うお、重くねえかこれ？」

「うん。中身ほとんど本だから。」

「…本、ね。」

少し引きつった顔をした将佳は俺と同じ普通の完成の持ち主みたいだ。

少しホッとした。

そつえば将佳にも可愛くて清楚な彼女がいるな…。

「また明日な。」

「おう。」

「一応、お世話になりました。」

「一応ってなんだ…。まあ、またこいよ、吏沙」

頭を撫でてやると吏沙はキョトンとしてから笑った。

「そういうのは兄ちゃん…」

「…いや、やらないから。」

少しでもこいつと離れるのを寂しいと思ってしまった自分を悔いた。こうして、僕と吏沙の共同生活は幕を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0480z/>

僕と彼女の共同生活

2011年12月1日21時46分発行